
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 37

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 721. 今学期に向けて
- 722. インタビューを受けて
- 723. オランダの博士課程事情と査読付き論文へ向けて
- 724. 今学期の履修コースについて
- 725. 科学論文の創出方法について
- 726. 日々の取り組みへの確信
- 727. 論文の読み方について
- 728. 箝口令を突破して
- 729. 内側に流れ込む怒涛の流れ
- 730. ユーモアと笑い
- 731. 一枚の写真から
- 732. 無私の境地から
- 733. 評論から考えさせられること
- 734. 音楽の具現化へ向けて
- 735. 死物化した概念と生命力を保持した概念
- 736. 強烈な幸福感と評論について
- 737. 能力の文脈依存性の正体:「超高速認知」の存在
- 738. 夜明けを待つ概念の蠢き
- 739. 生成の波と創造性の四つの発達段階
- 740. 丸の本質から死の本質へ

721. 今学期に向けて

昨夜就寝前に、今学期履修する「複雑性科学とタレントディベロップメント」と「創造性と組織のイノベーション」というコースの概要について確認していた。前者のクラスを通じて、「複雑性と人間発達」に引き続き、ダイナミックシステム理論の観点から人間の発達について考察を深めるとともに、より深く哲学的な観点やこれまで私が学んだことのない他の観点を通じて、人間発達について迫っていきたいと思う。

このコースはどうやら筆記試験のようなものではなく、クラス内で習得した研究手法を用いて、自らが関心のある発達プロセスを分析するレポートが課せられている。どうやらこの最終課題は、一人でレポートを書くのではなく、二人か三人の受講者が共同して執筆する形式らしい。正直なところ、諸々の理由から、私にとってグループワークというのはあまり好ましい形式ではないのだが、今後共著論文を書くための訓練の一環だとみなしたい。

そして、「創造性と組織のイノベーション」というコースでは、個人の創造性に関する学術的な理論を学び、個人の創造性を組織のイノベーションとして昇華させていくことに関する理論や方法を学ぶことが目的とされている。こちらは、最終試験として筆記試験があり、なおかつグループプロジェクトがある。こちらのプロジェクトは、クラス内で学んだ理論を用いながら、フローニンゲン大学のイノベーションを推進する改革案を提出することが目的にされている。

要するに、フローニンゲン大学に対するコンサルテーションのようなものを、実証ベースの科学的な理論を用いて行うことが課せられているのだ。こちらの課題もまたグループワークであり、今学期はどのコースにおいても他者と協働して課題をこなしていくことが求められている。これも私にとって何か意味があるのかもしれない。

履修予定の二つのコースの概要を確認したところで床に入った。すると入眠前に、ダイナミックシステム理論を発達科学に適用した第一人者のエスター・セレンとポール・ヴァン・ギアートが残した論文を、今学期の中で上手く時間を作りながら体系的に読み進めていきたいという思いが湧き上がった。そうした体系的な文献の読み込みに加えて、現在、書斎の上に積み重ねられている無数の論

文と書籍をなんとか読み通しておきたいと思ったのだ。それらを行うためには、より意識的に読むことの量と質を高めていかなければならないだろう。

とにかく明日から、午前中の最も集中できる時間に文献をどんどん読み進めていきたいと思う。そのような思いと共に就寝すると、夢の中で、背筋を虹色の流動体が流れるのを感じた。その流れは上から下に降りるといよりも、還流している感じのものであったように思う。こうした現象は、意識が覚醒状態と睡眠状態の中間地帯に位置している場合によく起こるものであるが、あのような虹色の流動体が自分の内側に流れる現象は初めてのこともかもしれない。そのような現象に見舞われたにもかかわらず、あるいはそのおかげか、今朝の目覚めはとても良いものであった。今日の仕事も非常に楽しみだ。2017/2/7

722. インタビューを受けて

今朝は五時半に起床し、履修コースの課題論文をいくつか読み進めていた。早朝に読み進めていたのは、人間発達に関する哲学的な論争に関するものである。古典的な論点であるが、生得主義と経験主義に関する論争において、経験主義の研究者が抱きがちな、生得主義に対するいくつかの誤った批判を、実証研究を例に挙げながら批判する論文である。

いつも論文に向き合うように、それらの批判内容を記憶するような読み方をするのではなく、むしろ著者の批判を通して、自分なりの考え方を育むことを意識していた。また、論文中の論点とは全く関係のない閃きを大切にしながら論文を読んでいく。論文にせよ書籍にせよ、結局のところ、よほどその領域に関する知識がない限り、一読しただけでそれらの文献を理解することは難しいということに改めて気付かされる。そのため、初読のときは、その論文の構成や著者の重要な主張を押さえることを意識するだけであり、あとはその論文を通して自分の中で湧き上がってきた考えを論文に書き込むことを行っている。

二読目や三読目ぐらいにならないと、細かな論点や著者の論理を精密に追いかけることは、私にとってとても難しい。それゆえに、特に優れた論文に関しては、やはり繰り返し読み込むことが大切となる。こうしたプロセスは、書籍を読むことに関しても全く同じである。

早朝の読書がひと段落ついたところで、昨年出版した『なぜ部下とうまくいかないのか: 自他変革の発達心理学』に関するインタビューを受けさせていただいた。普段、自分の研究内容や実務内容を話し言葉で表現する機会がほとんどないので、こうした対話形式の場をいただけることはとても有り難いことだと思っている。

日記を通して自分の研究内容や実務内容を紹介するのは、ある意味、一人称の実践であるのに対して、対話を通じてそれを行うのは、二人称的な実践だと言える。実践の人称が変化することによって、当然ながら光の当てられる領域が異なり、開示されるものも必然的に異なる。そうした意味で、一つの人称表現に縛られず、複数の人称表現を横断するような実践を行うことは、それぞれに固有の学びを私たちにもたらしてくれるのだと再確認した。また、普段行っている成長支援コーチングという実務の場においては、私は聞き手役に徹しているため、今回のように話し手になることは新鮮であった。

当然ながら対話の質に左右されるが、対話の本質は変容的なものであり、なおかつ治癒的なものだ改めて思わされた。極言すれば、変容的かつ治癒的な作用がないものは、対話と呼べないのかもしれない。今回のインタビュー記事が公開される日が、今からとても楽しみである。2017/2/7

723. オランダの博士課程事情と査読付き論文へ向けて

今日は午前中に拙書『なぜ部下とうまくいかないのか: 自他変革の発達心理学』に関するインタビューを受けさせていただき、その後、私が所属しているプログラム長のルート・ハータイ博士の研究室に足を運んだ。

ハータイ博士と私は年が一つしか変わらず、友人のような存在でもありメンターのような存在でもあるという関係から、親しみを込めてここでもルートと記しておく。ルートの研究室に足を運んだ理由は、今所属しているプログラムの最初の学期を終えてみて、どのような感想を持ったかに関するインタビューを受けるためであった。本日二回目のインタビューとなったが、終始一貫してルートとは様々な意見交換をした。正直に評価してみても、私が所属しているプログラムは文句のつけようがないくらい充実したものだと言える。

教授陣からのサポートも手厚く、自分の研究に関して私がある分野の専門家を探せば、十中八九その道を専門としている教授がこの大学に在籍しており、すぐに面会をすることができる。実際にこれまでも、様々な教授陣から研究上の助言をいただいていた。

本日学内のカフェテリアに立ち寄った際に、分野の異なる何人かの教授たちが和気あいあいとランチテーブルを共にしている光景を目撃した。このように、分野の垣根を越えて、多様な研究者が交流を図っているというのは、とても望ましいことのように思えた。

異なる分野を専門とする人たちとのやり取りは、やはりお互いの研究アイデアを刺激しあうことにつながるであろうし、異なる観点から自分の専門領域を深めていくきっかけにもなると思われる。だが彼らの姿を見ていると、実際のところは、自分の研究に有益だからという理由で他の教授たちとランチを共にしているというよりも、純粋にランチを通じた対話をお互いに楽しんでいるように私には思えた。

ルートとのプログラム評価に関するインタビューの中で、一つだけ気になる点があったのでそれを共有しておいた。それは、このプログラムが終了した後の博士課程進学の可能性についてである。基本的にオランダの大学院では、アメリカや日本の大学院と異なり、毎年博士課程の募集をしているわけではなく、教授陣が国や企業から助成金を獲得できた場合にのみ、それぞれの教授が博士課程のポジションを設ける仕組みになっている。

確かにアメリカの一流校の博士課程においても、ティーチングアシスタントなどの仕事を通じて給料が支給される。オランダでも当然ながら給料が支給されるが、それはアシスタント業務に対して支払われるのではない。それよりもむしろ、オランダの大学院では、博士課程に所属する者を学生としてみなすのではなく、研究者としてみなしているがゆえに、彼らが行う研究に対して給料が支払われるのだ。

こうしたことから、オランダの研究大学院で博士課程のポジションを得ることは相当に困難だということがわかる。実際に、私が所属している学科において、博士課程の研究者を雇おうとしている教授は今年の場合、三名ほどらしい。そして、その三名の枠に関しては、当然ながら、研究者としての技量の優れた者が雇用される仕組みになっており、私が所属している修士課程よりも、研究だけに

特化した二年間の修士課程に在籍している者の方が有利なのは確かである、という話をルートから聞いた。

ただし、仮に私が優れた研究の実績を示すことができれば話は別とのことであった。基本的に、研究に特化した修士課程の者たちですらも、在籍中に査読付き論文を執筆することはほとんどないため、やはり今取り組んでいる修士論文を発展させる形で、今年中に最低でも一つの論文を査読付き論文として、どこかのジャーナルに掲載してもらえるように尽力する必要があるだろう。とにかく今年、科学論文を執筆することに特化したリズムを掴み、論文執筆方法を自分なりに体系化していきたいと思う。2017/2/7

724. 今学期の履修コースについて

今学期は一つほど、公式な形で履修をしているのではなく、ある種の聴講生として履修しているコースがある。それは、以前「タレントディベロップメントと創造性」というコースの中の一つのクラスを担当したニコ・ヴァン・イペレン教授のコースである。コースのタイトルは「能力とモチベーション」というものであり、私たちが持っている能力の発達とモチベーションの関係を実証研究をもとに考察することを中心に、モチベーションが私たちのパフォーマンスに与える影響などについて理解を深めていくことを目的にしているコースである。

昨日は、午後からそのコースに潜り込んで講義を聴講していた。本来このコースは、産業組織心理学のプログラムで必修のものとなっており、仮に私が九月からそのプログラムに在籍することになれば必然的に履修するものなのだが、今のところ、九月からは実証的教育学のプログラムに進もうと思っているため、今回このクラスを聴講しておこうと思った。さらに重要な理由としては、知性や能力の発達を考えていく際に、感情的な要素、特にモチベーションの特性を掴む必要があるため、このコースを通じて、そのあたりの理解をより深めていきたいと考えていたのだ。

昨日のクラスは初回ということもあり、オリエンテーションの要素が多分に含まれていたが、知性や能力の発達とモチベーションの関係について考察を深める新たな観点を獲得することができるだろう、という予感がしている。クラスの終了後、「創造性と組織のイノベーション」というコースで要求されている課題論文をプリントアウトしようと思い、図書館に立ち寄った。このコースを担当するのは、イペ

レン教授と同様に、「タレントディベロップメントと創造性」というコースの中で一つのクラスを担当したエリック・リーツシエル教授である。

個人的に、リーツシエル教授の人柄に惹かれるものがあり、創造性とイノベーションという観点から個人の発達と組織の発達を架橋させたいと思っていたため、今回のコースを履修することになった。どのクラスでもそうなのだが、コース便覧を見たときに、どのような論文を履修者に読ませようとするのかによって、そのコースの面白さがすぐに分かるものである。今回は要求されている論文がどれも私の関心を引くものであったため、非常に有意義なコースになるだろうと期待している。

フローニンゲン大学は研究に重点を置いている学術機関であるため、どのコースも基本的に、学術論文を通じて獲得された実証研究の成果などをもとに議論を進めていくことが多い。しかし、このコースでは、学習した学術的な理論や実証研究の成果をもとにしたコンサルティングプロジェクトもあるため、実務的な要素も盛り込まれたものだと言える。

今学期はそれらの他に、「複雑性科学とタレントディベロップメント」というコースを履修することによって、引き続き複雑性科学の観点から発達現象への理解を深めることを計画している。いずれにせよ、これらの三つのコースを通じて、「発達」という現象に対して多角的に理解を深めながら、実務への応用可能性を絶えず模索するつもりである。2017/2/8

725. 科学論文の創出方法について

フローニンゲンの街も二月に入ってからしばらく経った。先週は比較的暖かい日が続いていたが、今週は再び最高気温がマイナスとなる日々が続いている。今日は最高気温がマイナス1度なのだが、体感はずっとマイナス10度ぐらいに感じられるという予報が出ている。十倍に寒さが強化されているのはなぜなのか気になるところだが、粉雪が散らつく様子を書斎の窓から見ると、確かに外は非常に寒そうだ。だが、それでも今日は昼食前にランニングに出かけようと思う。

早朝から諸々の学術論文に目を通していると、ふと、自分の関心事項が泉のように次から次へと湧き上がってくることに気づく。文献に目を通すときの私の思考は、良かれ悪しかれ拡散しており、先ほどの関心事項は「創造性」「組織のイノベーション」「重層(重ね合わせ:superposition)」などであった。それらの関心は、分離した形で自分の中で湧き上がってくるのだが、それらの一見関係のない

ように思える概念群は、何らかの一つの形を作ろうとするような意図(もしくは「動き」)を持っているように思える。

「発達」という現象を中心軸に据えて探究活動を続けていると、知らず知らず、探究の幅が広がっており、様々な概念に自ずと触れることにならざるをえない。しかし結局のところ、そうした概念を全て同時に深めていくことはできず、一つ一つじっくりと自分の内側の進行に合わせてそれらを深めていくしか方法はない。より厳密には、ある概念について少し考えると、別の概念に関心が飛び火し、そこで少しばかり思考を巡らせると再び別の概念に関心が飛び移り、そこから気づかないうちに、また最初の関心事項に戻ってくるというようなサイクルが生じているのがわかる。そうしたサイクルを通して、自分の知識体系がより強固に、かつ高度なものになっていくのだと思う。

知識の体系化に関するテーマ以外に、もう一つ自分の中で大きなテーマが継続的に存在している。それは、学術論文を執筆する方法に関するものである。あるいは、作品としての学術論文を創出する法則性を掴み、その法則を絶えず再検討しながら実際の論文を執筆していく実践というものが、以前から長らく重要なテーマとして浮上している。

昨日も偶然ながら、「創造性と組織のイノベーション」というコースの参考資料の中に、担当講師のエリック・リーツシエル教授が執筆した「科学論文の執筆方法」という短めの文章があることを見つけた。「何を書くか」というのは当然重要なが、「なぜ自分は学術論文を書くのか」という論文の存在意義そのものを私は問い続けたいと思っており、同時に、論文の存在意義について自分なりの意味を見出すことが何にもまして重要であると考えている。

また、「どのように論文を書くか」というのは、論文という作品を仕立てあげる技術的なテーマに属するが、これも非常に奥の深いテーマだと思っている。同分野もしくは異分野の科学者に対して、自分のメッセージを明瞭に伝えるために、「どのように論文を書くか」という方法論的なテーマの探求は不可欠である。私は論文を読んでいると時折、そこに得も言わぬ恍惚感を覚える時や、思わず笑みを漏らさずにはいられない面白さや驚きを感じることもある。もちろん残念ながら、全ての論文がそのような感情を喚起してくれるわけでは決してないのだが。

私の中で、優れた学術論文は、単に新たな科学的発見事項を報告するような文章ではない。往々にして、そうした文章は非常につまらない。確かに、科学は「真善美」の領域のうち、真の領域を司るものであり、発見された事項を忠実に伝えるために客観的な言語を用いざるえないのは納得できる。それどころか、学術論文を執筆する際に、客観的な言語を用いるというのは、見知らぬ人や目上の人に敬語を使うのと同様に、論文執筆の作法である。

ただし、問題なのは、論文の存在意義や論文の創出方法に関する探究を怠っている研究者の文章は、そうした作法の中に閉じ込められているがゆえに、彼らが執筆した論文は読者の内側を搔き立てるような作用がほとんどないことである。

学術論文は、その分野における新たな知見を紹介していくものであるため、必ずこれまでにはない何か新しい発見事項を伝えていく必要があるのだが、皮肉にも、それを伝えるための技巧を磨かない限り、その文章の読者は「それで何？(so what?)」という興奮めた感覚しか持たないのではないかと思う。つまり、私が是が非でも実現させていきたいのは、学術論文を感動や驚きをもたらす一つの装置にしたいということである。そのためには、感動や驚きという感情はそもそものような性質を持ったものであり、私たちはどのような時にそうした感情を抱くのかについて考えを深めていかなければならない。

また、何にも増して重要なのは、読者をひきつけるストーリーをいかに構築していくのかに関する方法論を、自分なりに探究していく必要があることである。もちろん、学術論文は小説のような物語ではないが、何かを順序立てて読者に伝えるという点においては、やはり物語の性質を強く持つ。イントロダクションはまさに物語の開始を表すものであり、コンクルージョンは物語の終焉を示すものである。論文の構成は、徹頭徹尾、読者をうまく導く水先案内人のような役割を果たさなければならず、読者が論文の内容に対して感動や驚きを持ってもらえるような流れを生み出す役割を果たすようにしなければならない。

神話学者のジョゼフ・キャンベルが世界の神話の創出の中に法則性を見出したように、そして、辻邦生先生が小説の創出の中に法則性を見出したように、私は学術論文の創出の中に法則性を見出したいと思う。新たな科学的な発見事項を客観的な三人称言語で表現しながらも、読者に玉虫

色の感情を喚起させるような方法論を自分なりに何としても構築したいと思う。これは今の私にとって、とても重要なテーマである。2017/2/8

726. 日々の取り組みへの確信

今学期は前の学期と異なり、夕方からのコースが一つある。今日参加したのは、「複雑性科学とタレントディベロップメント」というコースであった。このコースは元来、過去数年間オランダ語でのみ提供されていたものであるが、今年から英語での履修を希望する学生が4名以上いた場合には、英語でも開講するという話を半年前に聞いていた。

私がフローニンゲン大学に来た最大の理由は、複雑性科学の観点—ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス—から発達現象を探究することであった。以前の学期に履修していた「複雑性と人間発達」というコースはまさにその目的に合致したものであり、今回の「複雑性科学とタレントディベロップメント」というコースも前回のコースの延長線上にあるようなものである。そのため、複雑性科学の観点から人間発達についてより理解を深めるために、このコースをどうしても履修したかったのである。

なんとか英語での開講にこぎつけるため、私は、同じプログラムに属している友人やオランダ語で提供されている発達心理学のプログラムに在籍するオランダ人を勧誘していた。結果として、英語で開講できる人数を確保することができ、無事に英語でこのコースを履修できることになったのはとても喜ばしい。

今日は初回のクラスであったが、期待していた通り、内容が非常に濃いものであった。マライン・ヴァン・ダイク教授とラルフ・コックス教授は、発達心理学に造詣が非常に深く、同時にダイナミックシステム理論にも造詣が深い。特に、コックス教授は、以前紹介したように、非線形ダイナミクスに関する数学的な理論や技法に精通している。今日のレクチャーは主にコックス教授が担当したのだが、前回の「複雑性と人間発達」のコースと同様に、いつもコックス教授からは大きな刺激を受ける。

正直なところ、彼が述べていることを全て理解することはできないのだが、理解できない点を今後の課題にすることによって、発達現象に対する自分の理解の裾野が格段に広がり、なおかつ重層的なものになっているのを実感する。まさに、今日のクラスの中でも取り上げられたのだが、発達という

のは多階層的なプロセスであり、各々の階層は互いに独立していながらも相互に影響を与え合っているのだ。例えば、自分が持っている知識体系を考えてみた場合にも、ある上位概念の理解が進むことによって、下位概念の理解が進むことが起こっていたり、その逆も起こっている。

あるいは、概念が上下関係を成していなくても、階層が違う場所に属している知識の理解は基本的には独立して深まっていくが、その過程の中で相互作用が見えないところで生じており、二つの知識がさらに高度なものに変貌を遂げていることを経験することがある。そのような知識の多階層的な発達プロセスを経験しているのは確かであるが、同時に、やはり自分の知識体系は非常に脆弱であると今日も実感した。自分が構築している発達心理学に関する知識体系を客観的に眺めてみると、大きな穴がいくつも空いていることがわかる。

ここ最近、ようやく発達心理学の全体像を頭の中に描くことができつつあるのだが、それが幸か不幸か、自分の知識体系の不十分さを痛感させてくれるのである。それらの穴の所在を含め、自分が今後何を学習していけばいいのかが見えていることは一つの救いだ。

発達心理学のみならず、複雑性科学に関する知識体系を堅牢なものにしていくのは、より時間のかかるプロセスであり、そちらに関しては、まずは強固な土台を構築していくことが何よりも重要な作業となるだろう。論文や書籍と日々触れ合う中で、それらの知識項目が、自分が頭に描く全体像のどこに位置するものかを把握しながら、建築材料をどこに・どのように配置するのかを常に意識した取り組みが大切になる。同時に、知識体系の階層構造を含め、全体像そのものを日々更新していくことすらも要求されているのかもしれない。

自分の内側に知識体系を構築していく試みは、一生涯をかけて行われるものであるという認識が以前よりも増して強くなっている。そのため、現状の自分の知識体系の脆弱さと貧困さに対して過度に落胆することもなく、焦らず着実にこの試みを遂行していこうという思いに至っている。というのも、私は毎日の自分の取り組みをようやく信じられるようになってきたからだ。2017/2/8

727. 論文の読み方について

昨日の「複雑性科学とタレントディベロップメント」のコースを通じて、論文の読み方について再考を迫られるような思いになった。このコースは通常のものよりも時間が長く、三時間にわたって行われ

ることになっている。前半の一時間は担当教授からのレクチャーに当てられており、次の一時間は二人一組か少人数のグループワークに当てられている。

最初のレクチャーは全て英語で行われるが、グループワークからは英語かオランダ語を選択することができる。私は英語のグループを選択し、昨日は四人ほどの受講者が英語のグループを選択していた。このコースはマライン・ヴァン・ダイク教授とラルフ・コックス教授の二人が担当しているため、グループワークでの課題をこなした後、各教授がオランダ語と英語のグループがいる部屋を訪れ、最後の一時間は教授を交えてディスカッションをするという構成になっている。

今回のグループワークの課題は、生得主義を批判する経験主義者の主張を実証結果を引き合いに出しながら批判するという論文を取り上げ、四つの質問に答えていくものであった。事前に一読した際に、著者の主張の大枠を把握していたつもりなのだが、いざ課題に取り組んでみると、自分の読みが相当に浅いことがわかった。課題の焦点は、経験主義者が生得主義を批判する際に代表的に用いる六つの論拠に対する著者の批判的見解の内容を掴み、その著者の主張に対してさらに私たちが肯定的・否定的な見解を独自に展開していくことであつた。

また、著者の見解を実証研究で明らかにするためにはどのような実験を行うことができるのか、という提案なども考えさせられる課題となっている。二人一組でこの課題に取り組むこともできたのだが、今回は英語のグループは人数が少なかったため、同じプログラムに属するインドネシア人のタタ、「複雑性と人間発達」のコースで知り合いになったオランダ人のピーター、そして二月から発達心理学の修士課程に在籍することになったドイツ人のフランの四人でこの課題に取り組むことにした。

グループワークに取り組んでみて気づいたのは、私を除く三人がこの難解な論文を非常によく理解しているということであつた。特に、論文の構造や論理の流れを適切に把握している姿を見て、背筋が正されるような思いになった。

著者の主張は何であり、それをどのような論理展開でサポートし、具体的にどのような事例や実証結果を挙げているのか、ということ意識しながら論文を読むことはとても基本的なのだが、どうも私はそうした基本を蔑ろにする癖があるようだ。いかなる学術論文を読む際にも、論文の基本的な構

造と流れを明確に意識しながら読み進めていくことが必要になるだろう。構造を把握しながら文書を読み進めていくと、著者が次に何を言おうとしているのかを予測することが可能になる。

こうした予測は文章をより容易にかつ深く読むことを可能にしてくれる。さらには、このように構造を紐解きながら読み進めた論文の内容というのは記憶に残りやすく、自分の知識体系をさらに高度なものにするための血肉化された資材となりうるのだと思う。今日から改めて、論文の読み方に注意をしていく必要がある。2017/2/9

728. 箝口令を突破して

今日は芯から冷える一日だった。最高気温がマイナスであるか否かは、外に出た時の体感ですぐにその違いがわかる。午後になっても最高気温がマイナスから抜け出すことはなかった。このような日は本当に寒い。身も凍えるような日が続いているが、相変わらず日々の充実ぶりには自分でも目を見張るものがある。

外気が下がれば下がるほど、内側の熱気を示す内気が上昇していく様子を見て取ることができる。それぐらい、今の私にとって毎日はとても充実したものだと言える。自分が到達しようと思っている境地から今の自分を眺めると、両者には絶望的なまでの隔たりがある。また、日々の仕事の深まりも亀の歩きよりも遅いとさえ言える。

それにもかかわらず、一日一日が素晴らしい日であったと何のためらいもなく言えることができるのは本当に嬉しい。このように毎日がとても充実したものとして感じられるのは、私の中で、「一日」という時間単位の捉え方が変わったからだろうし、それ以上に、もはや生きることの意味と生き方そのものに大きな転換があったからだろう。私は、自分が歩もうとする道や到着地点を、もはやそれほど重要なものとして位置付けることはなくなった。同時に、日々の歩みのプロセスでさえも重要なものとみなせなくなっているのだ。

目的地点でも過程でもなく、私にとって重要なのは、歩き続けるという行為だけなのだ。私が歩き続けるのではなく、歩き続ける行為が私なのだ。歩き続ける行為が私になる時、それは生がもたらすあの爆発的な歓喜にも似た充満性と一つになることに他ならないように思えて仕方ない。おそらくこ

れこそが、一人の人間がその人固有の人生を生きようとする時に初めて感じられるような感覚なのだろう。

オランダの地に到着し、今私は初めて自分の人生を真に生きているような気がするのである。こうした感覚は、六年前に日本を離れ、米国で四年間生活をしていた時には感じられなかったような感覚である。おそらく当時の私は、自分の人生を真に生きるための諸々の準備が整っていなかったのだと思う。ただし、米国での四年間があったからこそ、今この瞬間に自分の人生を真に生きられることが実現されつつあるのだと思う。

確かに、日本での生活の中に精神的な面での窮屈さや閉塞感を感じていたのは確かだろう。そこから米国に生活拠点を移すことによって、徐々に窮屈さや閉塞感を解放していったという構図を考えることは比較的容易だ。しかしながら、私はこの構図はあまり正しくないように思える。なぜなら、各人固有の人生を真に生きることの難しさは、何も日本だけではなく、どの国においても同じだと思うからである。

ある国で生まれることは、必然的にその国の文化と同じ根を持つことになる。私たちが自分の人生を真に生きるためには、その根っこを一度抜き去ることによって、文化に縛られることを超えていかなければならないように思えるのだ。文化とは集合的な意識に他ならず、それと個人の意識が繋がっている根っこを抜き取り、自分独自の根を育みながら、再び母国の文化という大地に根を差すことは容易ではない。

だが、これをしなければ、私が自分の人生を生きるのではなく、自分の人生が私を生きるという関係性はいつまでたっても生まれてこないように思える。そして、この関係性こそが、その人にしか感じることのできない各人固有の人生の味なのだと思う。

残念ながら私たちの社会には、各人固有の人生を歩むことを禁じるような力が存在しており、それだけではなく、自分の内側から湧き上がる独自の思考や感情すら抑え込もうとするような力が存在している。それは何か、私たちの思考や感情、そして生き方に関する箝口令のようなものに思えて仕方がない。

今の私の内側には、社会が生み出すそのような箝口令を是が非でも打ち破りたいという衝動が芽生えているのである。箝口令を突破したその先に、自分の人生が私を生きるということ、歩き続ける行為が私になるということがやってくるのだと思う。2017/2/9

729. 内側に流れ込む怒涛の流れ

前の学期が終わり、新学期が開始するとともに、私の中でも一つのフェーズが終わり、新たなフェーズが始まろうとしているのを感じる。これはまだ私にとって未知な現象なのだが、およそ三ヶ月ごとにやってくる季節の周期に合わせて、自分の内側でも新たなものが芽生えてくるのを感じるのだ。発達理論の観点でいえば、三ヶ月ぐらいの時間単位で生じる発達は「メソな発達」と呼ばれるが、こうしたメソな発達が確かに自分の中で起こっているということを観察することができる。

そして、これまでの私の人生において、こうしたメソな発達を捉えることは非常に難しかったが、今の私には、メソな発達が生じた際の前後の差異が、もはや見落とせないほど明確なものとして自分の眼に映る。まさに今の私は、オランダに来てから二度目のメソな発達を遂げたのだと思う。

今週から本格的に新学期が始まり、正直なところ、毎日の振り返りが全く追いついていない。咀嚼すべき項目が目の前に山積みになっているような感覚だ。もちろん知識的な意味で振り返りをしておきたいことがあるのと同時に、経験としても振り返りをしておきたいことが無数に存在しているのである。毎日二つか三つの日記を書き記すだけでは、全くもって量が足りないのだ。

裏返せば、日々の生活の中において、知識的・経験的な学びがそれほどまでに多く、そして深いものと言えらるだろう。今の私は、文章を大量に書く形で内側の思念を外に表出させておかなければならないほど、内側に流れ込んでくる怒涛の流れに飲み込まれそうなのだ。仮に内側に流れ込む知識や経験を再度外側に表出させる行為を行わなければ、それらに押しつぶされてしまうかもしれないとすら思う。それぐらい、日々の知識や経験を咀嚼するための振り返りが追いつかない状況にある。

しかしながら、学期の初めということを考えると、これは致し方ないのかもしれないとも思う。というのも、私はいつも学期の始まりの最初の週から次の週にかけて、その学期で課せられる全ての課題文献に目を通すからである。これは米国の大学院時代においても習慣にしていたことであるが、と

にかく学期の開始に伴い——事前に課題文献が分かっている場合には学期が始まる前から——、全ての書籍と論文を一読しておくのである。

これはもちろん、日本語・英語を問わず、私の文章読解力が優れていないという問題もあり、他の人が一回か二回で理解する内容だとしても、私は最低五回ぐらい同じ文章を読まないで理解が進まない。そのため、理想的には学期が始まる前から、それが無理であれば、少なくとも学期の始まりとともに、全ての文章を一度は必ず読了しておくのである。この作業が終われば、学期の進行に合わせて、余裕をもって繰り返し文献を読み込んでいくことができる。

とにかく、一度も読んだことのない未知な文献をできるだけ早い段階で既知に変換しておくということが重要になる。今学期は、これまでの学期以上に大量の論文が課題となっており、さらには、自分の研究や関心に合わせて無数の論文を読むことを自らに課しているため、ここ最近では文章を書くことよりも、自然と文章を読むことが増えてしまう。そのような最中にあっても、いや逆にそのような最中であるからこそ、文書を書くことを怠らないようにしたいと思う。2017/2/9

730. ユーモアと笑い

今日は午後から、「創造性と組織のイノベーション」というコースの初回のクラスに参加した。このコースは産業組織心理学に属するものであり、コースを担当するのは、個人の創造性と組織のイノベーションを専門としているエリク・リーツシエル教授である。リーツシエル教授は以前、「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースのゲストレクチャーに招かれていたことがあり、そのレクチャーが私の関心を強く引くものであったため、今回のコースを履修しようと思った。

クラスが行われるレトロな雰囲気のある教室に到着してみると、すでに受講者がまばらにいた。どのあたりに座席を確保しようか一瞬迷ったが、結局、最前列の真ん中に座ることにした。クラスが始まると、リーツシエル教授がゆっくりと講義を開始した。リーツシエル教授のクラスが面白く感じられるのは、一方的な説明を彼の方から行うのではなく、受講生を巧みにレクチャーに引き寄せながら、双方向的な色合いを持って講義を進めるからだと言える。

個人の創造性を専門としているから創造的に見えるのではなく、実際にリーツシェル教授はクリエイティビティに溢れた人物だと私は思っている。教室空間の作り方、講義資料の中身と構成、それらの中にクリエイティビティが現出しているからこそ、彼のコースは惹きつける何かがあるのだと思う。

今日のクラスでも、リーツシェル教授のユーモアから繰り出される発言に対し、教室内は大いに盛り上がっていた。やはりユーモアや笑いという要素は、学習にとって不可欠なもののように思える。教室空間にユーモアや笑いがもたらされることにより、それが潤滑油となって、受講生が積極的にクラスに参加しようという姿を見てとることができる。ユーモアや笑いには、学習を促進するようなエネルギーが充満しているとさえ言えるかもしれない。

クラスの途中、教室の最前列の真ん中に座っているにもかかわらず、私は頻繁に、リーツシェル教授の説明とは何ら関係のないことを考えていた。非常に些細なことであり、私はなぜリーツシェル教授の発言をほぼ完全に理解することができるのか、ということをもとに考えていたのだ。これは単純に、リーツシェル教授の英語が流暢だという問題ではない。リーツシェル教授のクラスで扱われる内容は、私のこれまでの専攻や実務経験と大きく重なっており、そこで得られた知見のおかげで、教授の話が手に取るように分かるのだと思ったのである。

これは少しばかり見落としていた点であり、私が学部時代に専攻していた経営学の知識と経営コンサルタントとして働いていた実務経験は、馬鹿にできないほどの言語体系を自分の内側に静かに構築していたのだと気付いた。こうした言語体系がなければ、企業組織をテーマとし、経営学に隣接した産業組織心理学の話を手早く咀嚼していくことはできないだろう。

そのようなことを考えていると、皮肉にも、今の私の専門分野であるはずの発達心理学や複雑性科学のクラスの説明を完全に理解したと思えることは、今のところ一度もないということに気付いた。それはやはり、それらの領域に関する自分の言語体系の未熟さを示すものだと思うのだ。ユーモアに溢れる教室空間に身を置いていると、そうした自らの未熟さも微笑ましく思えるから不思議であった。

2017/2/9

731. 一枚の写真から

一昨日に行われた「複雑性科学とタレントディベロップメント」のクラスの中で見た一枚の写真が頭から離れない。今でもその時に受けた印象が色濃く私の内側に残っている。その写真は何の変哲も無いものだと言えるかもしれない。それは、巨大な蟻塚が映し出された写真である。

このレクチャーを担当していたラルフ・コックス教授は、この写真を用いながら「自己組織化」という複雑性科学の中で極めて重要な概念について説明をしてくれた。実は、私は自己組織化に関する説明を聞く際に、こうした蟻塚の写真を過去何度も目にしていた。写真それ自体は全くもって目新しいものではないはずなのに、妙にその時の自分に響くものがあったのだ。実際に私は、蟻塚のイメージをノートに書き写し、自分がその時に感じていたことを簡単にメモしていた。

人間の身長のおよそ三倍ほどの高さを持つ蟻塚を目の当たりにした時、あの小さな蟻たちがこのような巨大なものを生み出したことにある種の感動を覚えていた。全くの砂地から、このような巨大なものを生み出したプロセスと、その背後にある物語に想像を膨らませないわけにはいかなかったのだ。

周りにある砂つぶを集め、平坦な土地に徐々にそれを積み重ねていく蟻たちの姿。人間のような意思を持たない蟻たちが、一匹一匹自律的に砂つぶを集めてきては、それを少しずつ積み重ねていくプロセスと物語に打たれるものがないだろうか。

写真に写っていた蟻塚が完成するまでに要した時間は、どれほどのものだったのか私にはわからない。だが、長大な時間をかけてそれが出来上がったことは想像に難くない。小さな蟻たちが築き上げたある種の巨大な建築物を見て、私はなんだか励まされたような気がしたのである。小さな黄色い閃光のようなものが私の中に芽生えたのは確かである。

この写真が本来示す、発達現象に潜む自己組織化や累進的差異化などという概念は、その時の私にとって全く重要なものではなかった。重要なことは、意思ある人間として献身的に日々の仕事に取り組み、それを積み重ねていくことであった。そして、蟻たちがその巨大な蟻塚を構築している時の姿勢そのものに着目しなければならなかった。彼らは、他の集団の蟻たちが作っている蟻塚と自分たちが作っている蟻塚を決して比較することなどなかったはずなのである。

ましてや、過去の蟻塚や未来の蟻塚と自分たちが今この瞬間に作っている蟻塚を比較することもなかったはずである。さらには、自分たちが今この瞬間に作っている蟻塚でさえも、それがどのような大きさを持っているのかを気に留めなかったはずなのだ。つまり、蟻塚を構築するという彼らの行為の源泉は、他者比較でも、自己比較ですらもないのだ。他者と比べることをせず、自分と比べることもしないという自他超越の次元の中で、時間を超越しながらその仕事に取り組んでいたはずなのだ。

これが自分が打ち込む取り組みとの完全なる合一化の要諦であり、人知を超えた創造物をこの世界に顕現させる秘密なのだと思う。そのようなことを思いながら、私はまた少しおかしな想像をしていた。おそらく、写真に写る巨大な蟻塚を創造した蟻たちは、彼らの命が尽き果てるまで砂つぶを積み重ね続けていたのではないか、という想像をしていたのだ。今の私に必要なのは、これまで以上に透徹した意思と精神であり、生が終焉を迎えるその日まで、小さな仕事を積み重ねていくことに尽きると思うのだ。2017/2/10

【追記】

この日記はとても重要なことを指摘しているように思う。一年以上も前に見たあの蟻塚の写真を出しながら、その時に感じていたことを再び今この瞬間に感じている自分がいた。アリは他者比較をすることも自己比較することもなく、とにかく今という時間の中に生きて自らの取り組みに打ち込んでいる。その姿勢と生き方に改めて心打たれるものがある。小さな砂粒を日々小さく積み重ねていくこと。取り組みとの絶対的な一体感の中でそれを行っていくことの大切さを改めて思う。今日ワルシャワのショパン博物館で見たショパンの生き方もそのようなものであったに違いない。ここからまた、今日この瞬間からまた、自分にできる小さなことを積み重ね続けていきたい。ワルシャワ:2018/4/14 (土) 15:15

732. 無私の境地から

今日も非常に寒い一日になりそうだ。オランダで過ごす日が、一日、また一日と過ぎて行けば行くほどに、自分の内側の時間の密度が濃くなっていくことを実感している。無限な時間感覚の中にながらも、時間がいくらあっても足りないというのが正直な気持ちである。数年前に自分を対象とし

て、一日のうちにどれだけの時間を仕事に当てることができるのかに関するデータを取っていたことがある。

これは一般的な仕事の定義と合致しないかもしれないが、活字を読み、活字を書くという探究活動全般を仕事と捉え、それを時間で測定したものである。以前の私は、一日に12時間を超える形で探究活動をすると、そこからは極度に集中力と思考力が減退し、仕事にならないことを実感していた。だが、ここ最近の私は、その限界値を超えた形で日々の仕事に取り組むようになってきている。文字どおり、できれば寝食以外は全て自分の探究活動に時間を充てたいという思いが強くなる。

それほどまでに内発的な動機が湧き上がり、それが閾値を超えると、動機すらも存在していないのではないかという境地に至るから不思議である。もしかすると、過去数年間の私は、内発的な動機や、ある種の衝動に駆り立てられて日々の仕事に取り組んでいたように思うのだ。しかし、内発的な動機や自分を駆り立てるものを突破した先があるのだと最近強く実感している。その先にあるものは、無私の境地で仕事に打ち込むことなのだとすることに気づき始めている。

これは非常に面白いことではないだろうか。私たち個人の内発的な動機を突き詰めていった先には、個人的な感情が入り込む余地は一切ないのである。ある意味、自分の内発的な動機を感じることや、自分を駆り立てるものを感じている時点で、それはまだ小さな自己に囚われていることの証左に他ならないと思うのだ。小さな自己の殻を突き破り、そこからより大きな存在と一体になる道を歩み始める時、内発的な動機や自分を駆り立てる個人的な感情が雲散霧消するのである。依然として私は、小さな自己に囚われながら日々の仕事に取り組むことが多いのは確かだが、無私の境地から仕事を形作れるようになってきていることもまた確かなことである。

それは仕事をする人間として、とても喜ばしいことのように思える。そのようなことを考えながら、私は日々の生活の中で、ある種危険な発達実験を自らに課していることについて考えが及んだ。それは私が意図的かつ無意識的に行っているものだと言えるだろう。具体的には、人間の発達に関する説明理論や支援理論を自分自身に当てはめるということを、時に意図しながら、時に全く意図することなく行っているようなのだ。

そうした実験の過程を書き留めているのが、この日記の果たす役割なのかもしれない。実際に、私は自分の日記がある一定の数に到達したら、それらの日記に再度目を通すことを行っている。ここでやっていることは、日記という観察データを通じた検証作業なのだと思う。日々の探究生活の中で出会った説明理論と支援理論を自分自身に当てはめてみたときに、どのようなことが起こっているのかを観察データから検証しているのだ。

毎日少しずつ書き溜めた日記というのは、非常に良い時系列データになる。フローニンゲン大学で研究生活を始めたおかげで、日記という定性的なデータを定量化する手法について色々と学ぶことができた。そして何より、定量化されたデータを解析する手法をいくつも学ぶことができたのは大きなことである。数年後、数十年後まで日記を書き続けることができれば、いつか自分自身の発達過程を明らかにするような研究に着手するかもしれない。そのような日が来ようと来まいと、今日も明日も日々の足取りを日記として書き続けたいと思う。2017/2/10

733. 評論から考えさせられること

今日も早朝から仕事が非常にはかどった。芸術鑑賞において、作品の背景にある知識を獲得することが鑑賞経験をより豊かにするという思いから、現在カーティス音楽院のオンラインコースを受講している。これは以前紹介したように、ベートーヴェンのピアノソナタに関する理解を深めていくことを目的にしたものである。そのコースの中で、モーツァルトはハイドンから多大な影響を受け、ベートーヴェンはモーツァルトとハイドンの双方から多大な影響を受けていたということを改めて確認し、これまであまり聴いたことのなかったハイドンのピアノ曲を聴いてみようという思いに至った。

昨夜、ハイドンのピアノソナタが合計で5時間分集められた動画を見つけ、それをMP3に変換した。今朝は仕事と共に、ハイドンの曲をずっと聴いていた。これからハイドンの曲をより真剣に聴いていくつもりであり、ハイドンに関する知識を少しずつ習得していこうと思っているため、今のところハイドンのピアノ曲について何も語るができない。

他の作曲家のピアノ曲と比較するためにも、そしてハイドンの曲を深く理解するためにも、彼の曲と真剣に向き合う時間を持ち、一つ一つの楽曲の意味を紐解いていくような試みを継続させていくこ

とが重要になるだろう。こうした積極的な関与がなければ、芸術作品から私たちが意味を汲み取ることは難しいため、つくづく芸術鑑賞というのは奥が深いものだと思わされる。

先日偶然ながら、音楽評論家の吉田秀和氏の仕事を知る機会があった。吉田氏の仕事について調べてみると、彼の音楽評論は独特であり、特に文体の美しさを指摘するような評価を多数目にした。また、他者の意見に惑わされることなく、常に自分の感覚から出発し、自分の考えを明確に表現する評論形式を持っていたということを聞いて、なおさら吉田氏の文章を読んでみたくなった。残念ながら、現在の私の生活拠点の都合上、今すぐに吉田氏の文章に目を通すことができないが、日本に一時帰国した際には、吉田氏が執筆した書籍のどれかを読みたいと思う。

吉田氏に関する情報を得たことによって、評論という表現形式そのものについて少しばかり考えさせられている。評論の役割や表現方法について私は無知であるため、そもそも評論とは何なのかを出発点として、このテーマについても自分なりに考えを深めていきたいと思う。吉田氏の仕事について調べていく中で、今少なくとも言えることは、評論というのは私的な感想を述べるのではなく、他者や社会的なものに迎合するようなものでもないということである。

評論の非常に重要な要素として、自分の内側の感覚という主体的なものから出発していながらも、それを表現する態度は常に客観的でなければならないということが挙げられそうだ。その人固有の感覚と意見や観点がないものは、いくら客観的な記述がそこでなされていても、とてもつまらない評論になってしまうと思う。そして、そうしたものはおそらく評論と呼ぶにふさわしくないだろう。学術論文を執筆することと評論を執筆することはまた異なる表現活動だが、主観的なものを出発点にして、それに客観性を与えていく形で表現を行わなければ非常につまらないものになってしまうという点において、両者は多分に共通しているように思える。

今の私に求められるのは、主観的な感覚や感性を研究の中核に据えて、それを科学論文にふさわしい形で表現するための方法を自分なりに見つけていくことである。そうした意味からも、評論というジャンルから得ることが多いように思えてきたのだ。そのようなことを思いながら、昨夜の夢をふと思い出した。昨夜の夢の中で、すでにこの世を去られている森有正先生が私の目の前に現れた。

そして、森先生が私の日記を読み、いくつかの感想を述べてくださった。具体的にどのような感想を述べてくださったのかは明瞭ではないが、とにかく気恥ずかしい気持ちになったことは確かである。この気恥ずかしさは、やはり言葉を通じた自分の表現力の未熟さを常々自覚しているからだと思う。言葉を通じた表現活動について、それが日記という形式を取るにせよ、書籍という形式を取るにせよ、学術論文という形式を取るにせよ、言葉を通じた自らの表現力により一層の磨きをかける鍛錬を継続させていきたいと思われた。2017/2/10

【追記】

この日記で指摘しているように、日本語と英語を含め、自分が活用する言語の深まりはゆっくりとしか進んでいかないことに気づかされる。これは何度も繰り返し述べる必要がないのかもしれないが、言葉と内面の成熟は対をなしており、それらはどちらもゆっくりとしか深まりを見せない。ただし、自分の言葉も内面もどちらも共に未熟だとしても、その未熟さから絶えず出発しなければならないのだ。それを常に肝に銘じながら、今日も文章を書き続け、自己が少しずつ深まっていくことに尽力したい。ワルシャワ:2018/4/14(土)15:27

734. 音楽の具現化へ向けて

夕方の仕事を終え、浴槽に浸かっている最中に、本日の午後に書いていた日記について、少しばかり説明を補足しなければならないとふと思った。それは、芸術鑑賞における知識の重要性についての日記である。その時に書いていた文章は、基本的に絵画鑑賞よりも音楽鑑賞を念頭に置いていたように思う。楽曲に真摯に向き合うことと、豊穡な背景知識を獲得することにより、音楽体験が深まるというようなことを書いていたように思う。

もちろん音楽体験そのものを深めることは価値あることなのだと思うが、音楽体験を深めることが私にとって重要なのではない。深められた音楽体験を日々の生活の中に溶かし込むことが、私にとってより重要なのだと思う。美しい音楽に恍惚感を覚えることは尊い体験でありながらも、それに耽溺したくないのだ。耽溺さを超えて、音楽体験が日々の仕事に滲み出し、日々の生活から片時も離れぬ形で音楽体験が溢れ上がるように生きたいのである。

そのため、単純にある楽曲の知識を増やすことは、私にとってほとんど重要ではないと言える。私の音楽の向き合い方には、どうやら辿っていかねばならない段階があるようだ。つまり、楽曲に向き合う姿勢を育みながら、楽曲に関する知識を獲得していき、音楽体験を徐々に深めていくというプロセスを経て、それが常に自分の仕事や生活の中に否応無しに滲み出てくるようにしていくプロセスである。

敬愛する辻邦生先生が、音楽から受け取ったものを小説という形で表現したように、私も、音楽から享受したものを学術論文という形で具現化させたいと強く願う。いや、人間の発達研究のみならず、発達支援の実務や日々の生活の中の一つ一つの行為の中に、音楽が形となって現れるようにしたいと思う。

非常に難解な試みかもしれないが、まずは学術論文という表現様式の中で、音楽から受け取ったものが滲むようにしていきたい。その方法を考えていくことが重要であり、それを常に実際の文章の執筆の中で試してみたいと思うのだ。表面的な点として、論文の中で選ぶ語彙の質感、それらの語彙が生み出す一つのセンテンス、複数のセンテンスが生み出す一つの段落、複数の段落が生み出す一つの章、複数の章が生み出す一つの全体が、自分独自の音楽を奏でるかのような形で表現していきたい。当然ながらこれは、私の単なる理想である。

こうした理想を実現させるためには、兎にも角にも、本業である知性発達科学に関する深い知識と研究を進めるための技術がなくてはならない。それらが最優先させなければならないことでありながらも、頭の片隅では、常に音楽と一体化となった仕事を進めていきたいと願っている。仕事の中枢に音楽的な何かを据えることを絶えず意識し、音楽的な何かの仕事上の表現活動において必然的に滲み出るようにしたいと強く思う。2017/2/10

【追記】

この日記が書かれてから半年後には、作曲という表現形式を通じて、実際に自ら音楽を創造することに従事することになった。日々の仕事の中に音楽的な何か滲み出すだけでなく、音楽そのものが自分の日常から湧き上がってくるようになったのである。

今、ワルシャワの宿泊先のホテルに戻ってきた。ショパンの曲を聴きながら、こうした音楽が自分の人生に流れ込んでくるのと同時に、自分の人生から外側に音楽が溢れ出してくるようになった。人生は本当に何が起こるか分からない。ワルシャワ:2018/4/14(土)16:10

735. 死物化した概念と生命力を保持した概念

早朝起床してみると、昨日に考えていたことが、まだ自分の中に留まり続けていることが分かった。それは自分の中に留まりながら、少しずつ前進しているかのようだった。

実際に今朝起きてみた際に、昨日考えていたことに対して、また少し違った観点と考えの深まりを発見したのである。昨夜考えていたのは、音楽から享受したものを学術論文という言葉の世界の中に表出させることであつた。昨日指摘したように、これは非常に難しい試みだと改めて思う。なぜなら、音楽というものは、生き生きとした感情や感覚が内包されたものに他ならず、それらを殺さずに言葉の世界に移すことが難しいからである。

ドイツの文学作家であるミヒャエル・エンデの父、エドガー・エンデはかつて、言葉によって概念化されたものは、言葉にされたものを殺してしまう、というような趣旨の指摘をしていた。特に、「概念とはイメージが殺されたものだ」という主張をしたエドガー・エンデは、画家らしいと言えば画家らしい。私は、エドガー・エンデの考えに賛成な部分もありながら、反対な部分がある。

賛成な部分は、確かに言葉によって生み出された概念は、言葉にされたものを殺してしまう可能性が高い。実際に、私が論文や書籍を読んでいて全く味気なく思うことが多々あるのは、そこで表現されている言葉が死んでいるからだ。より正確には、そうした味気ない文章の中で表現されている言葉には、概念化される前のイメージが殺され、概念化される前の生々しい感情や感覚が殺されてしまっているのだ。そうした点において、エドガー・エンデの考えに賛成である。

しかしながら、私は、概念化される前のイメージを保ち続け、概念化される前の生きた感情や感覚を内包させている文章に出会うことがある事実を見過ごすわけにはいかない。往々にして、私が感銘を受ける論文や書籍にはこの特徴があるのだ。それが論文の体裁を取ろうと、小説の体裁を取ろうと、人を感動させる文章というのは、文字どおり感情を動かす力が内包されており、そうした文章の言葉には生きた感情が梱包されているのだ。いやもしかすると、梱包というよりも、読み手が文章

に触れた時に、必然的に感情が溢れ出てくるような力を秘めた言葉がそこに存在しているのだと思う。

仮に概念化された言葉が、概念化される前のイメージや感覚を殺すものであるならば、私たちが言葉から鮮明なイメージや生き生きとした感覚を汲み取ることのできる理由をうまく説明することができないだろう。そのようなことを考えてみると、死物化された概念と同時に、生命力を持った概念というものも存在していると思えて仕方がないのだ。このような理由から、私はエドガー・エンデの主張に対して、部分的に賛同しながらも、部分的に反対していたのだ。

ここから私は、音楽がもたらしてくれるあの生き生きとした感覚を、言葉の世界に生きた形で移行させることは不可能ではないと考えている。音楽が与えてくれる、言葉が生まれる前のあのイメージやあの感覚を殺すことなく、言葉を与えていきたいと強く思う。言葉が生まれる前のイメージや感覚は、実に多種多様な特性を持っているが、その多様性を損なわずに一つの言葉に置き換えていくのである。

言葉が生まれる前の始原的な性質を損なうことなく言葉を与え、その言葉に触れた時、言葉が生まれる始原的な世界に帰ることができるようにしたいのだ。そのような試みを、できる限り毎日の文章執筆の中で実行したいと強く思う。2017/2/11

736. 強烈な幸福感と評論について

昨夜就寝に際して、あまりに強烈な幸福感を自分が感じていることに気づいた。これは昨夜の就寝前のみならず、ここ最近の私は、日常生活の瞬刻瞬刻の全てが幸福感に包まれたものだと実感するようになっている。ただし、とりわけ昨夜の幸福感は強烈な印象を私に与えた。それは、言葉を絶するような幸福感であり、言葉を超越した幸福さこそが真の幸福感なのかもしれない、と改めて思わせるようなものだった。

そうした言葉を失うような幸福感に包まれていたのは確かなことだとしても、そこからさらに考えさせられることがあった。それは何かというと、昨日考えていた評論の特質についてである。冒頭で私は、自分が体験した感情について述べたが、それは単なる主観的な体験の報告でしかない。例え

ば、芸術評論を例にとると、作品から湧き上がってきた主観的な感情を紹介することや、主観的な感想を述べることは評論に値しないのだと思う。

確かに、評論の出発点は、作品によって喚起された主観的な感情であり、それを表現せざるをえないほどの切迫感のようなものが必要になるのだと思う。だが、それはあくまで出発点であって、終着点では決してない。主観的な感情に対して、客観性を与えるような試みをしなければ、評論を読む読者にとって何の意味も持たないものになってしまうだろう。まさに主観的な体験に客観性を与えることによって、それが他者にとって理解可能なものになり、読者自身の考えや感覚を促すようなものになっていくのだと思うのだ。

これは主観的な体験の普遍化であると言い換えていいだろうし、こうした普遍化の手順を取ることが、評論にとって何より重要なのだとふと思ったのだ。日々の日記の中で、私は極めて主観的な体験を裸体のまま記述していることに気づく。もちろん、日記というのは本来的にそうした性質を持つものだと思う。だが、主観的な体験をせめて経験にまで昇華させた形で表現していきたいと思ったのも事実である。

仮に経験にまで昇華させることができなかつたとしても、私的な感覚や感想を単に記述するのではなく、それを普遍化させていく姿勢を持ちたいと思う。言葉というものが本質的に他者との共通理解を育むためのものであるならば、私的な体験を言葉を通じて普遍化させた形で伝えていくことがなおさら重要になるだろう。

また、内側の感覚が深化していくことにおいて、言葉の深化が不可欠なものであるならば、主観的な感覚を深めていくためには、言葉を通じた普遍化を实践する必要があるように思うのだ。昨夜自分を襲った極めて強烈な幸福感を契機として、そのようなことを考えさせられた。2017/2/11

737. 能力の文脈依存性の正体:「超高速認知」の存在

今日の午前中は、「複雑性科学とタレントディベロップメント」のコースで課題となっている論文に目を通していた。偶然ながらその論文は、私がロサンゼルスで生活をしていた時に購入した“Toward a Unified Theory of Development (2009)”に収められているものであった。書斎の本棚からその書籍を取り出し、中身を確認してみると、課題となっている論文に関して、数年前の私は一度も目を通

していないことがわかった。当時の私は、この書籍に収められたカート・フィッシャーとポール・ヴァン・ギアートの共著論文を中心に、18本の論文のうち、11本の論文に関心を持っていたことが書籍中の書き込みを見てわかった。

その時の私は、今日読むことにした論文“Soft-Assembled Mechanisms for the Unified Theory”にはどうも関心がなかったようである。だが、今日この論文を読んでみて、非常に示唆に富んだものであることがわかり、実際に新たな観点を私にもたらしてくれた。

カート・フィッシャーやポール・ヴァン・ギアートを含め、ダイナミックシステム理論を発達科学に適用した科学者たちが強調しているように、私たちの知性や能力は文脈に左右される。つまり、置かれている文脈が異なれば、発揮される知性や能力の種類が異なり、そして種類のみならず、そのレベルが異なるのだ。こうした発想は、ケン・ウィルバーやロバート・キーガンの発達理論ではあまり明瞭に語られていないが、近年の知性発達科学の動向に敏感な人であれば、非常に馴染みのある考え方だろう。ただし、そもそもなぜ私たちの知性や能力が文脈によって変動するのかについて、疑問に思ったことはないだろうか。

これについては、私も以前から疑問に思っていた。これまでの私はどちらかというと、私たちは過去の経験や知識をもとに、意識空間内にある種の規則や法則のようなものを作り出し、外側の文脈が変化することに応じて、内側で構築したそのような規則や法則をその都度発揮するようなイメージを持っていた。結論から述べると、これはあまり正しくないイメージであることが分かった。

実は、今回の論文のタイトルにも含まれている“soft assembled”という用語を数年前から目にしていたのであるが、その用語の意味をいまいち掴めないままこの数年を過ごしていた。実際のところ、知性や能力の発達に関して探究を進めれば進めるほど、自分の中で正確に説明できる概念というのはごく僅かであり、未だ無数の概念が説明できないものとして私の内側に放り込まれている。

今日は、そのように意味を正確に掴んでいないもののうちの一つの概念によりやく光が当たったと言える。私たちの知性や能力が“soft assembled”されているというのは、知識や経験に基づくアルゴリズムのような固定的な法則性を発揮して文脈に適応するのではなく、知識や経験がより緩やかに構成される形で瞬刻瞬刻の文脈に即座に対応していくことを意味する。

ここが面白い点なのだが、緩やかに構成された知識や経験が即座に文脈に適応できるというのは、逆説的でありながらも不思議なものに映るかもしれない。一般的には、固定的なアルゴリズムをあらかじめ備えておいた方が、刻一刻と変化する文脈に即座に適応できるように思えるかもしれない。しかし、これは実証研究から誤りであることが分かっており、そもそもそれは旧態依然とした行動心理学的な発想のように思える。つまり、私たちの知性や能力というのは、何らかの外部刺激があつて初めて発動されるようなものではないのだ。

実証研究で明らかになっているのは、外部刺激がある以前から、何と私たちの知性や能力は絶えず準備をしているという特徴を持つことが分かっている。つまり、私たちの知性や能力は、外部刺激があつて、それに対して固定的なアルゴリズムを突如として適用するのではなく、外部刺激がある前から、私たちの知性や能力は意識空間内に潜伏しており、いつでもそれを発動できる準備状態を絶えず維持しているのだ。

この違いはとても大きいので、簡単に言い換えると、前者の発想は、知性や能力は文脈による何らかの刺激があつて初めて現実世界に姿を表すイメージを持っているのに対して、後者の発想は、知性や能力は刺激がある前から意識空間内に準備状態で存在しており、文脈からの刺激が変化すると、柔軟に形を変えながら現実世界に姿を表すイメージを持っているのだ。

これを実証する研究として、「超高速認知 (ultrafast cognition)」と呼ばれる現象が明らかになっている。興味深い実験としては、スクリーン上に鳥と車が映し出されることを被験者に伝え、実際に車が映し出された時に、被験者が過去の知識と経験から生み出した鳥と車の違いに関する概念分類 (アルゴリズム) を適用するよりも遙か先に、スクリーン上に映し出された車を察知していることが証明されている。このように、対象を既存の規則や法則に当てはめて認識するよりも圧倒的に早く、私たちは対象物の存在を捉えることができるのだ。こうした認知能力の存在は、知性や能力が持つ文脈依存性という特徴をより明らかなものにしてくれる。

私たちの知性や能力は緩やかに構成されているからこそ、その中に揺らぎがもたらされ、瞬間瞬間の文脈の変動に柔軟かつ即座に適応できるように思われる。仮に、知性や能力が固定的に構成されているのであれば、そのような瞬間瞬間の変動に対して適応することは難しいだろう。まさに、上記で紹介した実証研究が示すように、私たちは過去の経験によって構築したルールを文脈に対し

て単純に当てはめているわけでは決してなく、私たちの知性や能力は、常に意識空間内に準備状態を維持しながら緩やかに構成されているのである。今この瞬間においてもそうだ。2017/2/11

738. 夜明けを待つ概念の蠢き

今日の午前中は論文の読み込みから始まり、午後から就寝までは論文の執筆を行っていた。自分に関心のある論文を読み、論文を緻密にじっくりと執筆できる今日のような週末は、充実感に溢れており、夢のように早く過ぎ去った。明日もまだ日曜日であることが、どれほど自分にとって嬉しいことか。明日も今日と同様の生活を送りたい。

夜の就寝前に論文執筆の手を止めた時に、イマニュエル・カントが体系的かつ建築的な方法で思想を構築していったことを改めて見習いたいと思った。私も論文の執筆を通じて、少しずつ独自の方法で、体系的かつ建築的に知識体系を構築していきたいという思いを改めて持った。

一日の振り返りとして、どうしても今日の午前中の文献調査の一件が頭から離れない。午前中に読んでいた論文に関して、本来であればより多くのことを書き留めておきたいというのが正直なところである。能力の文脈依存性の特徴についても、まだ言及しきれていないことが多々あり、同時に、まだ不明瞭な点も多々あるのだ。さらに、その論文で取り上げられているその他の論点についても、書き留めておきたいことが随分とあるのだ。

だが、今の段階でそれを行うのは少しばかり困難さがつきまとう。それは、単純に英語から日本語への変換がうまくできないということではなく、そもそもそれらの論点が自分の身体にまだ染み渡っていないために不可能なのだと思う。つまり、論点が形作る意味の総体を、私はまだ完全に掴んでいないということだ。それでは、論点の構成する主要な概念についてはどのようなことが言えるだろうか。

どうやら、論点を構成する概念の姿をイメージすることはできるし、その概念が持つ味も分かるのだ。ただ今の私にできないのは、そうしたイメージや味を自分の言葉に変換することである。そう考えてみると、論点を作る意味の総体を把握する前に、まずは個別の概念を自分の言葉に置換させる作業が重要になるだろう。こうしたことを考えながら、言葉というものを真に掴むことには多大な時間が要求されると改めて痛感した。

本日取り上げた“soft assembled”という概念との出会いは、かれこれ二年以上も前のことであるにもかかわらず、ようやく自分の言葉として徐々に姿を表すようになるには、今日という日まで待たなければならなかった。一つの言葉との出会いから、その言葉が自分の言葉になり始めるまでに、実に二年の時間を要したのだ。その言葉が自分の内側で一つの形になったのではなく、その言葉が自分の内側から姿を現し始めるまでに二年がかかったのだ。その言葉が真に自分の言葉になるためには、さらに膨大な時間がかかるだろう。

しかし、数年間放っておいた概念がこのような形で、徐々に自分の内側でその真の姿を現し始めたことはとても嬉しい。学習というのは、本来的にこのように長大な時間をかけて緩やかに深まっていくプロセスなのだと思う。

自分の内側に、説明のできない無数の概念が蠢いているのを知っていたが、その蠢きは不気味なものではなく、至って正常なものである。また、そうした無数の概念が、来るべき時に真の姿を見せる準備をしているのだと分かったら、安堵感をもたらされるとともに、日々の探究活動の励みとなった。こうした励みをもとに、明日からもまた、自分の内側で蠢いている無数の概念と向き合い、その中から一つでも真の姿が顕現されるようにしていきたい。こうした試みを一つ一つ焦らずに実行していくことが、いつか自分の内側に高くそびえ立つ体系を作ることにつながるのだと信じている。2017/2/11

739. 生成の波と創造性の四つの発達段階

一昨日と昨日は共に、音楽の流れに乗っていたという感覚がある。それは音楽の旋律や律動に乗っていたということではない。作曲家がその楽曲を作った根元にある生成の波に乗っていた、ということである。どうも私には、何かを絶えず創造し続けることができた者たちの共通事項として、こうした生成の波を掴めたか否かが鍵を握るような気がしてならない。

これは創造性の枯渇という現象と密接に関係している問題だと思う。これまで類稀な創造性を発揮していた人物が、ある時突如として創造性を発揮できなくなってしまうことがある。その原因の最大のもものは、そうした生成の波に乗り損ねたか、その流れから滑り落ちたかなのではないかと思うのだ。

生成の波からの転落を引き起こす要因は、様々なものが考えられるが、とにかく創造を司る生成の波をひとたび掴み損ねてしまうと、それは創造性の枯渇を生むような気がしてならない。

これまでは毎日の仕事の中で、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ショパン、ロベルト・シューマン、クララ・シューマンのピアノ曲を一日中聴いていた。私はどうも、ピアノという楽器が奏でる音に魅せられる傾向にあり、交響曲のように多様な楽器が鳴り響くものは、種類の異なる音が多いため、思考が幾分混乱しやすく、仕事をする際には適していないと思っている。

日々の仕事の中で、ピアノというただ一つの楽器が奏でる音がそこにありさえすれば、それ以上望むものはないというような思いがある。一昨日からは、それらの作曲家以外のピアノ曲を聴くようになった。具体的には、ヘンデル、ハイドン、リスト、ワーグナー、メンデルスゾーン、ブラームス、チャイコフスキー、ドビュッシー、サティ、スクリャービン、ラフマニノフ、ラヴェルが残したピアノ曲を文字通り一日中聴いている。

こうした作曲家の中には、私の不勉強もあり、ピアノ曲を残しているとは知らなかった者もいれば、やはり全く聴いたことのなかったピアノ曲がある。このような膨大な量のピアノ曲と共に仕事を進めることによって、一昨日と昨日は、それらの楽曲の根元にある生成の波に乗っているような感覚がしたのだと思う。

そのような感覚からふと、2016年の年末に開催したオンラインゼミナールで取り上げた論点について思い出した。それは、創造性の四段階モデルである。創造性というのは何も、モーツァルトやアインシュタインのような、幾世代にもわたって名前が残るような偉大な人物たちが発揮できたものだけを指すのではない。実際には、そうした創造性は四段階モデルの最後の段階(Big-C)に属するものであり、実際には、その段階に至るまでに三つの創造性の段階があるのだ。

それらは順番に、mini-c、little-c、pro-cと呼ばれるものであり、ここではそれらの特徴についての説明を省略するが、それらのプロセスを辿る過程の中で、各人固有の生成の波を掴むように尽力することが重要に思える。

興味深いことに、生成の波は各人固有のものでありながらも、波の根元は共通の一つの流れのようなのだ。私たちが自らの固有の生成の波とさらにその根元にある一つの大きな流れとつながること

ができれば、一生涯にわたって自分の内側から湧き出るものを形として創造していくことができるように思われる。そのためにも、絶えずその流れを掴むことを意識しながら日々の仕事に取り組みたいと思う。重要なのは、今の仕事の結果ではなく、創造を司る生成の波を掴む道を歩いているかどうかだ。2017/2/12

【追記】

この日記を読みながら、欧州での二年目の生活以降、私は自らの創造を司る生成の波に乗りながら日々の生活を送ることができ始めているように思う。日々の全ての仕事がこの生成の波から生まれている。あるいは、波に乗る主体は消え、もはや自己の存在が創造の波に他ならないような状態になっていると知覚する。ワルシャワ:2018/4/14(土)16:33

740. 丸の本質から死の本質へ

清らかな太陽が昇る朝。暖かな太陽光が優しく差し込む昼。静かな闇に包まれた夜。そのような日曜日だった。

今日は午前中に、産業組織心理学の論文を四本ほど読んでいた。それらの論文はどれも、「創造性と組織のイノベーション」というコースで課題にあがっているものである。このコースを担当するエリック・リーツシェル教授の論文選択は非常に巧みであり、各クラスのトピックを多角的かつ重層的に理解することを促すような文献構成になっている。

つまり、ある一つの論文を読み、次の論文に移ってみると、一見したところ相矛盾するような主張や実証結果が紹介されており、丹念に両者の論文を読まなければ、両者は単純に異なる主張や実証結果を紹介しているにすぎないという読みで終わってしまうのだ。それらの文献を読むときに要求されているのは、それらの主張の前提を把握することや、実証研究のデータの種類や性質を適切に掴むことだろう。そのような点に配慮しながら、課題となっている論文を読み進めていた。

それらの論文を読了した後に、昨日に引き続き、研究論文の執筆に取り掛かり始めた。昼食までの時間、そして昼食後から夕方にかけて、合計五時間以上の時間を費やして執筆作業に取り組んでいた。しかしながら、気づいてみると、五時間以上の時間をかけたにもかかわらず、形となったのは

500字程度の文章だけであった。第二弾の書籍を執筆した時を振り返ってみると、このくらいの時間があれば、15,000字から20,000字ほどの文章が形となっていたように思う。

これは単純に英語と日本語で文章を書くことの相違ではなく、やはり学術論文を執筆することと書籍を執筆することの間には埋めがたい違いがあることに気づく。今日執筆していた論文の箇所は、理論的な説明を施す箇所であり、先行研究を調査しながら入念に論理を組み立てていく必要があった。そうした都合上、文章を実際に書くというよりも、先行研究の文献を再度読み込む必要があったため、文章の構成と論理の構築にそもそも時間がかかっていたと言える。その結果として、本日の成果物だけを見れば、わずか500字足らずの文章が形となっただけだったのだ。

不思議なことに、わずか500字しか形になっていないのだが、随分と思考を巡らせることを迫られたように思う。やはり学術論文を執筆するというのは、慎重に言葉を選び、そしてそれらの言葉を緻密に組み立てていく行為なのだと思う。もちろん、これらは書籍の執筆においても当てはまることだが、そこに傾けられる精神エネルギーの度合いが随分と異なることに気づく。

単純な比較はできないが、作曲家が一つの楽曲を創出するかのような、あるいは、画家が一つの絵画作品を創出するかのような、対象との真剣な向き合いがそこに立ち現れている気がしてならない。少なくとも、私はそのように学術論文という作品の制作を捉えている。

どのような分野においても、対象と真剣に向き合うことによって初めて磨かれるものがあるのだと思う。愛好家感覚で対象と触れることでは得られないものが、真摯さで満たされた行為に宿るのだと思わずにはいられない。精魂を傾けて対象と向き合うというのは、本当に大事なのだと思う。

論文の執筆がひと段落したところで、書斎の窓からふと外を眺めた。今日という一日を締めくくるために、太陽が最後の輝きを振り絞っているような姿が見えた。私は書斎の椅子から立ち上がり、窓の方へ近寄った。そこで見えた太陽は、丸という形のアイデアを象徴するかのような姿を見せていた。私は生まれて初めて、「丸」というものを真の意味で知ったように思う。それぐらい、その太陽は丸の本質を顕現させていた。

そういえば、ここ最近の私はあまり外の景色を意識的に眺めることを行っていなかったとふと思った。太陽が完全に沈む頃、一つの考えが私の脳裏をよぎった。今私が行っている人間の知性や能力

の発達研究を突き詰めると、それは死に向かう人間の探究であることに他ならないということであった。

人間の発達プロセスとは、死に向かうプロセスに他ならず、私たち人間にとって、発達という現象は不可避なものに違いないのだが、それだけを見つめていると、もう一つの不可避な現象を見落とすことになってしまう。まさにそれが死という現象である。これまで言葉にならずにいたのだが、結局のところ、自分の探究テーマは、死へのプロセスの探究と同一のものなのだと思う。

死という現象を影の現象としてみなす一般的な考え方を押し払い、そして、光の現象として安易に捉えようとする誘惑を払いのけ、死という現象の本質を自分なりに掴んでいきたいと思うのだ。2017/2/12